

# ヒットのタネ

## カボチャ

### 糖度高めて需要獲得

野菜の中でタマネギに次いで輸入量が多いカボチャ。JA全農は国産の端境期の6〜8月にリレー出荷する産地を拡大している。出荷が最も早い産地の一つ、長崎県のJAごとうは、収穫を前倒させて販売単価の高い6月上旬に出荷。ニーズのある高糖度カボチャの増産を進めている。  
(川崎勇)

#### 長崎・JAごとう

カボチャは、6〜8月が国産の端境期に当たる。主産地の北海道産の出荷が8月に本格化し、11月までは国産の出回りが多いが、12〜6月はメキシコ産やニュージーランド産の出回りが増える。国内収穫量の半分ほどに当たる年間9万トンを上を輸入している。

#### 産地リレー安定

端境期の安定供給のため、全農は2019年から大手青果卸エム・ヴィン・エム商事(神戸市)と、契約栽培による6〜8月のリレー出荷に取り組み。22年は14県の31JAで60社栽培し、6月上旬の長崎、鹿児島から産地が北上して宮城、青森などと続く。同社は糖度12以上、水分率75%以下のカボチャを「ほめられかぼちゃ」としてブランド化。全国各地のスーパーに販売し、年々売り上げが伸びているという。同社は「どれを買っても甘い」と好評。JAごとうとの契約で産地リレーが

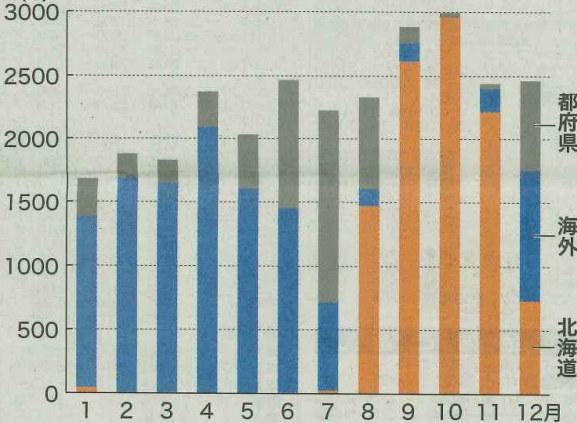


契約栽培のカボチャをコンテナに積み込む組合員  
(長崎県五島市で一同県五島振興局提供)

マーケットインの視点から産地戦略を報じます

## 端境期の契約出荷奏功

東京都中央卸売市場での月別カボチャ入荷実績 (2021年)



より安定した」と話す。21年から産地リレーに加わったJAごとうでは、今年1月から収穫が始まった。組合員16人が「ほめられかぼちゃ」の基準を満たすと、販売単価が上昇せられる。JAは同県五島振興局と連携し、糖度を高める肥培管理を検討。今年、養分が必要な開花時期に肥料が効くよう、一番果・二番果の開花前の追肥を従来より早めた。20㍓を定植する作型で、3週間栽培する藤田八雄さん

(71)は「糖度が高いと収入が増え、作りがいがある」と話す。仕立て方も工夫し、株数を増やして1株当たりつる1本、つる1本当たりの2果を収穫する方法を試す。養分を2果に集中させるのが狙いだ。これまでは1株当たりつる2本、つる1本当たり1、2果を収穫していた。

#### 無選別で省力化

カボチャの生産拡大は、選別や磨き、出荷の負担の大きさが課題となる。同社との契約栽培の場合は、鉄コンテナに収穫したカボチャを入れ、無選別で出荷するため大幅に省力化。同社の選果場でまとめて選別と磨き、箱詰めされる。JAは「収穫後の負担が少なく拡大しやすい」(農産園芸部)と話す。契約栽培の面積を24年に10㍓に拡大する計画だ。  
(次回はスイカ)